

## 「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
98-009	ミャンマー文学(18-19世紀の歌謡を中心として)の研究		
	ミャンマー	文化大学	1999.9 ~
	井上さゆり	東京外国語大学大学院	院生博士

### 研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

私の研究分野は、ビルマ古典文学である。具体的には、ミャンマー(特に研究対象とするのは、最後の王朝時代である18~19世紀のコンバウン時代)において、「文学」というものがいかなる目的で作られ、受容されてきたかということに問題関心を置いている。更には、「文学」と括られる対象は、国や時代によって異なること、「文学史」なるものは、政治的イデオロギーによって作り出されたものであるということを考察し、地域研究の一環として文学研究を行っていくことを意図している。

実際にこれまで行ってきた研究は、次の通りである。これまで私は、ミャンマー古典歌謡(1886年にイギリス植民地となる以前の歌謡)の歌詞について研究してきた。具体的に修士論文では、40余りある古典歌謡ジャンルの一つであるチョー・タチン(「弦歌」。竖琴を伴奏とする歌のジャンル)の歌詞を収集し、確認できた500篇余りの歌詞の内容を分析した。その結果、宮廷で作られ受容されていたと考えられているこのジャンルが、実際には、宮廷の外の世界でもととは作られていたものであり、それが宮廷にとり込まれ発展したということを明らかにした。その方法は、チョー・タチンに見られる「替え歌」に注目することにより、「替え歌」のもとである「もと歌」との違いを出していくことである。「もと歌」と「替え歌」の内容の違い(例:自然描写的なものと王権讃仰的なもの等)から、「もと歌」と「替え歌」の作られた場が、宮廷の外と内と異なっていたことを示した。

以上のような歌謡創作の流れは、チョー・タチンだけでなく他の歌謡ジャンルについても言えるのではないということが、現在私が立てている仮説である。ミャンマーにおける歌謡の創作は、宮廷の外のものが宮廷の中へとり込まれていくという大きな流れがあること、それはつまり既存のものを使いそれを作り替えていくという創作上の特徴に基づいていると考えられる。ミャンマー古典歌謡の代表的なジャンルとされる「パッピョー(鼓歌。太鼓を伴奏とする歌)」は、隣国タイの旋律を利用した歌謡であり、これも「作り替え」という創作の流れの中に位置付けられると思われる。以上のことから、博士論文においては、パッピョーというジャンルを作ったウー・サという人物(1766-1857)に焦点を絞り、彼のパッピョー創作がミャンマー文学史・音楽史において革新的であると同時に、伝統に則ったものであったことを明らかにし、ミャンマーにおける歌謡創作の意図を探っていくことを計画している。

以上のような研究のために、日本では不可能に近い資料の収集を現地でじっくりと行い、ミャンマー文学・歌謡に対する理解を現地研究者と共に深め、博士論文執筆の基礎を固めるために、ミャンマーへの2年間留学を希望している。

## 1 研究テーマと留学目的

私は「松下アジアスカラシップ」の1998年度における奨学生として、1999年10月より2001年10月までの2年間、ミャンマーのUniversity of Culture（文化大学）音楽学科に留学してまいりました。ミャンマーへの留学生は従来、University of Foreign Language（外国語大学）に集中していましたが、近年では他の教育機関・研究機関でも外国人の受け入れを了解する所が徐々に増えてきており、Univerisity of Cultureへの留学も、そのような状況のもとで許可が出た次第です。

私の博士論文のテーマは、「ビルマ古典歌謡の創作－18-19世紀の音楽家ウー・サのパッピョー（鼓歌）を事例として－」というもので、研究対象であるビルマの古典歌謡の歌詞（韻文）について読み込み、音楽についての勉強をすること、資料（文献・録音資料）を収集することが目的でした。

ミャンマー音楽（植民地化以前に確立した形式による音楽、いわゆるミャンマーの伝統音楽）の研究は、音楽理論面での研究が若干あるのみで、歌詞についての研究はほとんどなされていません。しかし、ミャンマーにおいて、音楽は基本的に歌詞・歌に基づくものであり、西洋における器楽曲というものは主流になく、ミャンマー音楽を歌詞と切り離して考えることはできません。

植民地化以前のミャンマーの文学は、韻文が主流にあります。歌謡の歌詞も韻文で書かれています。音楽を伴わない詩との違いは、詩に存在する規則が歌謡ではゆるやかに適用されていること、そして、音楽を伴うことです。歌謡は、詩よりもさらに一段階上にあるものとしてミャンマーでは受け取られています。残念ながら研究自体は少ない状況です。その理由には、文学研究者で音楽理論を正確に把握している人がほとんどいないこと、音楽に関わる人はほとんどが演奏家であり、いわゆる研究者ではないことがあります。従って、ミャンマー音楽を理論的かつ文学的に研究する分野が取り残されている状況です。

私は、卒論・修論を通して、ミャンマー音楽のジャンルのひとつであるチョータチン（弦歌）の歌詞についての研究を行ってきました。資料収集のためにミャンマーには定期的に短期で出かけておりましたが、音楽の勉強をするだけの滞在はできず、今回の留学以前は歌詞の研究に絞っておりました。収集した歌詞を整理し読み込む中で、チョータチンの作品（500篇余り確認）の中に、「替え歌」が多く存在することをまず見い出しました。そして、「替え歌」とその「もと歌」を読み比べている中で、歌詞の内容が「替え歌」では題材が王権讃仰や恋愛に集中するのに対し、「もと歌」の方は、自然描写や仏教渡来以前の信仰について題材が集中していることに気がきました。以上の理由から、私が研究対象としていたミャンマー音楽のひとつであるチョータチンは宮廷音楽と一般に言われているが、もとは宮廷の外の世界の音楽に源を持つと修論では結論しました。

以上の研究の延長として、王朝最後の時代に確立された歌謡ジャンルで、ミャンマー音楽の中心的なものとされるパッピョー（鼓歌）というジャンルについて、チョータチンで見られた「替え歌」創作の営みがパッピョーというジャンルにも生かされているのではないか、パッピョーがコンバウン時代に確立し、現在に至るまでミャンマー音楽の中心的存在として存在することには、ミャンマーの音楽史上、どのような理由により、どのような意義をもつことなのかを、博士論文ではテーマとしました。

## 2 留学の成果（具体的な項目については、別紙）

留学前の研究計画書（松下財団に提出）では、上記の研究内容に加えて、ミャンマーにおける「文学」というものが、いかなる目的で作られ受容されてきたか、ミャンマー「文学史」がいかなる政治的イデオロギーによって作り出されたものであるかということを考えてつつ、地域研究の一環として文学研究を行っていくことを意図する、と述べておりました。その問題関心は変わりませんが、留学中の勉強を通して、音楽・文学ともに奥深いものであることを知り、研究対象とする作品それぞれについての読み込みと理解を丁寧に深めていきたいと思うようになりました。

また、ある曲（「もと歌」）の歌詞を変えて「替え歌」を作っていくという歌謡創作の伝統の延長上にパッピョーというジャンルの成立を捉えたいと考えておりましたが、留学前の時点では、あくまでも歌詞だけを視野にいれておりました。しかし、留学中の音楽理論・実技（歌と豎琴）の勉強を通して、音楽理論からの分析も大きく加えていきたいと考えるようになりました。その理由は、チョータチン（弦歌）、ポエ（編み歌）、タチンガン（受け歌）というジャンルが、パッピョーが成立する以前の主な音楽ジャンルだったのですが、その三つのジャンルとパッピョー以後では、音楽史的に明確に分けることができることです。チョータチン、ポエ、タチンガンまでの音楽では、調律は一種類しか存在しませんでした。パッピョーにおいて、新しい調律が用いられるようになります。ミャンマー音楽の調律は、西洋音楽における単調でも長調でもない調ですが、パッピョーで用いられる調律（アウツピヤン）は、やや単調に傾き気味で、チョータチン、ポエ、タチンガンの調律（フニンロウン）では、感情表現の淡白な音楽であったものが、パッピョーにおいて、「恋しい」「悲しい」などの雰囲気を出すことができるようになります。また、チョータチン、ポエ、タチンガンでは、テンポはほぼ一定で進むのですが、パッピョーにおいては、テンポの崩れ（テンポが極端に遅くなる、早くなる、一定に進まない）などが顕著になり、それもまた、「恋しい」「悲しい」などの雰囲気を醸し出す要因となっております。歌詞もパッピョーではかなり長くなり、チョータチン、ポエ、タチンガンのジャンルの曲に比べると、はるかに表現の豊かなジャンルとなっているわけです。

以上のように、パッピョーというジャンルはミャンマー音楽史において、ひとつのエポックメイキング的なジャンルとなっているわけですが、チョータチン、ポエ、タチンガンといった既存の音楽ジャンルの基礎に基づき、その要素を多く取り込んだ形で成立していること

が、調律方法、演奏技術、歌詞の面から見ていくことができます。チョータチン、ボエ、タチンガンの調律とは全く異なる別の調律であるアウッピャンが用いられるわけですが、調律の際には、サウン（豎琴）の弦（当時は13弦）を一弦のみ音程をやや変えるだけです。主音、調律体系、モードは変化しますが、そのもとは、一弦の音程を調整しただけであり、チョータチン、ボエ、タチンガンの調律（フニンロウン）と、弦上では構造的に大きく変わるわけではりません。フニンロウンの調律が生かされているわけです。

また、ミャンマー音楽には「替え歌」が多いという点が、私の留学以前の研究テーマでしたが、実際に音楽を勉強してみる中で、一曲全部の「替え歌」だけではなく、多くの曲の間で、よく用いられる旋律が存在することが分かりました。ある曲のある部分の旋律が、他の曲でも用いられているというもので、これは同じジャンルの曲の中でいくつかの特徴的な旋律が、そのジャンルの曲の多くに使われていたり、また、ジャンルとジャンルの間でも、あるジャンルの曲に特徴的な旋律が、別のジャンルの曲に用いられていたり（例えば、チョータチンに特徴的な旋律が、ボエのある曲でも用いられていたり）します。このような部分的な「替え歌」は、ミャンマー音楽の基礎にあると言ってもよいでしょう。パッピョーは、歌詞の構造的にも音楽的にも新しいジャンルではありますが、チョータチン、ボエ、タチンガンに多様されている旋律を多く取り込んで作られています。また、パッピョーと同時代に成立したジャンルである、ヨーダヤー、モン、ポーレーといったジャンルに特徴的な旋律をも取り込んでおり、パッピョーはミャンマー音楽全ての要素を取り込んで作られていると言えます。

以上のようなパッピョーの特徴を音楽史の中で捉え直すと、パッピョーは、音楽史上まったく新しい形として成立し、そしてミャンマー音楽の最高峰的存在になった表現方法の豊かなジャンルと言うことができるのですが、パッピョーはまた、チョータチン、ボエ、タチンガンという既存の音楽の基礎の上に成り立ち、それらの要素を多く取り込んで成立したものでもあります。

以上の点は、留学を通して、現地の音楽家の先生たちについて理論・実技を学ぶ中で理解できてきた点であり、留学前の論文構想をさらに肉付けるものとして、取り込んでいく予定です。

資料は、歌詞の掲載された文献（コンバウン時代に作られたものの刊本版、独立後出版されたもの等）を一次資料としますが、存在する文献はほぼ収集できました。各図書館所蔵のペー（貝葉）、パラバイ（折畳み写本）については、見つけた限りのものは拝見させていただきましたが、マイクロフィルム取りは、国の仕事としてマイクロフィルムを取る予定があり、それが終了するまでは個人的には受け付けていないということで、残念ながら取れませんでした。現時点では、十数点の刊本を相互にチェックしながら歌詞を読み込んで行く方法しかないのですが、幸い刊本は古いものも含めてほぼ入手できています。今後は、この刊本に基づきつつも、機会があれば現地に赴き、ペー、パラバイをチェックしたいと考えております。その他、音楽、詩、ウー・サなどに関する研究文献についても、古本を含めて、500

点ほど収集しました。音楽・歌謡に関する研究自体があまりされていないことから、古本などを丁寧に集めるしか文献収集の方法はないのですが、それでも留学という長期滞在の利点を生かして、主要なものはほぼ集めることができました。

録音資料に関しては、ミャンマーで録音がされている古典音楽についてはほぼ入手し（200点ほど）、その他、各先生方所蔵の個人的な録音テープも100点ほどコピーをさせていただきました。また、必要なものについては、スタジオなどを借りて先生方に録音をお願いし、研究対象としているパッピョーの作品について、収集できる限りは録音資料を収集しました。

こうして「留学の成果」を書いていますと、やり残した作業が色々と思ひ浮かびますが、2年間という時間の中で、やはりこれが精一杯だったのかとも思います。2年間の成果をもとに、今後は論文をまとめていく作業に集中する予定です。松下国際財団の奨学金のおかげで、実り多い留学を体験できたことを、改めて感謝申し上げます。

(別紙)

## 成果報告書

### ○留学先大学での授業科目、具体的な勉強項目について

文化大学の音楽科では、私が初で唯一の外国人留学生ということで、私の博士論文の内容に沿ったカリキュラムを組んで頂き、授業も全て先生と一対一（もしくは先生が数名で学生が私一人）という、恵まれた環境を与えられました。大学は、半年に一度、一ヵ月ずつの休みがあるのみで、その他の時期は、月～木曜日、大学で授業を受けました。

大学で学んだ科目は、ビルマ語（現代詩・古典詩の読解及び作詩）、音楽理論（ビルマ古典音楽の理論）、歌（古典歌謡の実技）、楽器演奏（古典歌謡の竖琴実技）の四つです。大学での授業では時間・内容ともに不十分であったため、大学で教わっている先生に学外でのレッスンを受ける他、音楽理論については、学外の識者の方から、その方の自宅で週に2日、教わっていました。

#### (1) 語学

ミャンマー語は、留学前に大学での専攻として学んできており、読解・作文ができる他、日常会話についてはほぼ差し支えない程度に会話ができていたため、留学先の大学での勉強も、語学による問題はありませんでした。しかし、語学の語彙数、語彙の感覚などは、2年間の留学ではるかに上達しました。

#### (2) 詩の読解

留学の目的のひとつである、「韻文（詩）」、特に「古典詩」（18～19世紀の詩）の読解力をつけるという点については、留学前と比較しますと、まったく力がつきました。留学前は、散文の読解と作文にはあまり不自由を感じない程度にできたのですが、韻文は語彙も文法も散文とは異なり、読解はほとんど不可能でした。しかし、留学一年目に韻文の基礎を習い、自分でも作詩することによって、現代詩を読むことができるようになり、簡単な詩なら自分でも作れるようになりました。また留学二年目には、学外の先生について、私の研究材料であるコンバウン時代（1752-1885）の詩人ウー・サのパッピョー（鼓歌）の作品をひとつずつ丁寧に読んでいくことによって、この時代の歌謡作品（韻文で書かれている）を読み解く力がつきました。

#### (3) 「古典音楽」の理解

##### [1] 実技（歌・竖琴）

留学の主な目的である、「古典音楽の理解」については、留学前は指導者もなく文献に書かれてあることから漠然と想像するだけであったのが、古典歌謡の歌と楽器演奏（竖琴）を習うことによって、理解が深まりました。歌と竖琴は大学では毎日2時間ずつ、その他放課後、土日も先生について習い続けたため、実技の基礎力はついたように思います。歌も竖琴も、古典歌謡の中では最も難しいレベルにある、パッピョー（前述）まで習い、一応演奏できるまでにはなりましたが、テクニックの面ではまだ努力の余地を残したところで、留学の期間が終了した次第です。大学の音楽学科の学生が4年かかって進むカリキュラムを2年間

で終えたため、テクニックの練習の余地は残しましたが、古典歌謡の基礎を理解する段階までは終わりました。

## [2] 音楽理論

音楽理論については、日本で文献を読んで自分で勉強をしていましたが、文献からはよく分からないことが多い状態でした。理由は、実際に楽器に触れたことがないこと、そして、ミャンマーできちんと勉強してみても分かった理由ですが、ほとんどの文献が、ミャンマー音楽の理論を西洋音楽の理論で語ろうとしているため、西洋音楽の理論の誤解による混乱をしていること、です。

実際に歌と楽器を学ぶ中で、ミャンマー音楽が自然に身に付き、理解できるようになった他に、音楽理論をきちんと勉強している学外の先生が、好意で勉強を教えて下さり、理論のことも大部分理解できるようになりました。大学での音楽理論の授業は、週に1～2回で一回一時間程度だけだったのですが、その学外の先生のお宅では、平日は放課後4時間、日曜日はほぼ半日、先生の実演も含めたり、ミャンマー音楽に関するミャンマー語、英語文献を徹底的に読み込んだりしながら、理論を基礎から学びました。残念ながらミャンマーでは、一流の演奏家の方々でも感覚的に理論を知ってはいても、言葉として表す際には概念と用語との間に混乱をきたしていることが多く、理論を正確に把握し教えることのできる先生は、私が学んだ先生が唯一という状況でした。その先生から理論についてゼロから徹底的に教わり、私が研究テーマとしているパッピョーを理論と文学の両面から捉えるという点に一応集中して講義をして頂きました。その勉強の中で、留学前の論文構想の筋道は大幅に変更せずに、むしろ構想通りに、なおかつ、音楽理論の側面からの論証を加えながら書けるのではないかという実感をえました。